インターカレッジコープの現状、課題と新たな可能性

石毛昭範*1
Email: cbf52450@pop02.odn.ne.jp

*1：東京インターカレッジコープ常務理事、拓殖大学商学部教授

◎Key Words　　インターカレッジコープ，組織活動，組合員の参加

1.　はじめに

本報告は、学園内に生協を持たない高等教育機関の学生・教職員のための生協である「インターカレッジコープ」（以下「インカレ」）の現状と課題、そしてこれからの展望や新たな可能性についての報告である。

2.　インターカレッジコープとは何か

大学生協は、特定の高等教育機関（主に大学）の構成員がその生活の向上を図るために設立されたものであり、組合員はその大学などの学生・教職員（および当該生協の職員）がほとんどである。しかし、生協のある高等教育機関は200あまりに過ぎない（現在、高等教育機関＝大学・短大・高専・専門学校は計約1,200ある）。そこで、生協未設立の高等教育機関の学生・教職員のために、東京インターカレッジコープ（以下「東京インカレ」）をはじめとして、全国で６つのインカレが設立されている（北から順に宮城・東京・愛知・大阪・福岡・熊本）。インカレの中には、組合員の所属する大学・短大の学園内に店舗を設けているところもある（「サテライト店」といわれる）が、東京インカレの場合は学園内の店舗はない。もともと、未設立校への供給活動のみならず、設立運動の拠点としての役割を期待されていたともいわれる。

3.　東京インカレの概要

1993年に設立された東京インカレは、供給高は年5億円余であるが、組合員は2万人を超えており、組合員数でだけで言えば全国の大学生協でも有数の規模である。他の大学生協と異なり地域生協であり、東京都在住、または東京都に所在する高等教育機関に所属する学生・教職員が主たる組合員である。店舗は2店舗（渋谷・市ヶ谷）であり、供給活動の中心は郵便（カタログ等）・webによる通信販売活動および外部協力店舗（例えば自動車教習所）、協力校（生協未設立の大学・専門学校等でインカレの活動に協力いただける学校）を通じたものなどである。リアルでの組合員の交流も小規模ながらあり、理事会のほか、学生委員会活動も行われていて、交流イベントなどが年数回行われている。かつては設立運動を担うという役割も負っていたが、現在は直接関わらず、設立は東京ブロックに任せるという形になっている。むしろ、大学生協を広く（非設立校などに向けて）知ってもらうという役割を期待されており、そのゆえに東京ブロックから広告宣伝費用の補助を受けている。組合員集めには苦労しており、毎年主要未設立校の入学式や推薦入試に東京ブロックの協力を得て職員等を派遣、資料袋を大量に手渡し配付している（2018年度の場合約4万部）。

4.　インターカレッジコープの抱える問題

インカレは、組合員の加入・組織化、店舗や供給のあり方などで他の大学生協と異なった特徴をもつ。これに伴い、以下に示すようないろいろな問題を抱えている、

（1）利用される商品・サービスの偏りが大きい。利用の大部分が自動車教習所というインカレが少なくない。この場合インカレの利用が一度きりで終わる可能性が強い。

（2）サテライト店がない場合、供給活動は通販が中心になり（拠点としての店舗がほぼない）、日配・文具等は売れない。上述のような協力校がある場合もあるが、この場合学校によって売れる商品が異なる。ネット販売のノウハウは大学生協には十分蓄積されていない可能性がある。そもそも、大学生協の商品・サービスの、キャンパス内の店舗を離れた場合（例えば通販）の市場競争力はどの程度なのか、多少の疑問がある。その中で比較的競争力があると思われる共済は、地域生協（コープ共済）との協力が進むことになっている。大学生協全体としては喜ぶべきではあるが、共済加入を望んでインカレに加入する学生がある程度おり、インカレの加入者減の可能性が出てくる。

（3）組合員集めの苦労は大きい（東京インカレについては上述）。学校での加入関係資料の手渡し配付や、協力校における資料ラック配置などを行うインカレもある。

（4）組合員同士の交流や他生協（同一ブロック内も含めて）との交流が難しい。交流した場合でも他生協の組合員（特に学生委員）との共通の話題が乏しい。また、総代・理事集めにも苦労が多い。理事の長期化・高齢化もしばしば見られる。学生委員会などの組織活動はかなり困難な状況にある。ただ、サテライト店のあるインカレの場合、そのサテライト店のある学園では組織活動が盛んな場合もある（宮城・愛知など）。

（5）なかなか剰余が上がらないインカレが多く、常勤職員ゼロのところも多い。職員にとっても特異な生協で、多くの活動が未経験の活動ではないかと思われる。職員の異動もあり、経験の蓄積はかなり困難と思われる。

（6）サテライト店のあるインカレの場合、サテライト店のある大学の組合員と、そうでない組合員で受けられるサービスも意識もかなり異なる。出資金に差を設けている場合もある。サテライト店で赤字が発生した場合、他事業で埋めることを問題視されたこともある。

（7）インカレには地域生協形態のところと職域生協形態のところがあるが、地域生協形態のインカレの場合、員外利用の制限が厳しく、供給活動の大きな制約になる。特にサテライト店新設は、コンプライアンスの問題があり（地域生協の員外利用制限）、非常に困難である。

（8）かつてインカレは設立運動の拠点と位置づけられ

てきたこともあったが、もはやそうではないと思われる。設立につながったケースとしては、東京でかつて数例（星薬科大など）、近年では大阪で千里金蘭大の例（サテライトからの設立。おそらく全国初）がある。

（9）特に重要な点が、そもそも生協のない大学にとっては生協がないのが当たり前という実態である。特に大規模大学にその傾向が顕著で、学生にも教職員にも生協への意識は乏しい。大学の子会社や私厚連など、生協以外で学生・教職員に厚生サービスを提供するしくみはある程度存在している。他方で、生協の設立希望が上がってくるところは、現在では小規模校が多いのではないかと思われる。この場合、仮に設立しても採算面での不安につながりかねないという問題がある。

5. インターカレッジコープの新たな可能性 ー大学生協の企画参加による「学び」

このようにいろいろな問題を抱えているインカレは、供給面では、従来からの自動車教習所や共済、パソコン、協力校を通じた教科書等の販売、特に近年ではIT・WEBを活用した事業展開など、いろいろな努力を重ねてきている。他方、大学生協が他の業者と大きく異なる点が、組織活動や連帯組織の存在、そして生協を通じた学生・教職員の「学びと成長」である。上述のとおり、インカレの組織活動は盛んとはいいがたいが、それでも連帯組織等の活用による可能性はあると思われる。ここではその一例として、大学生協の企画である「Peace Now」にインカレを通じて参加した学生の体験を紹介したい。

大学生協の企画に、生協未設立校の学生・教職員が参加することは容易ではないが、インカレに加入して参加することは可能である。大学生協の海外短期研修（例えば「テーマのある旅」）はその一例であり、参加者の声の中にはそういった参加者によるものも散見される。大学生協が長く取り組んできた平和活動に参加するケースは、これまであまりなかったのではないかと思われるが、藤本俊明講師（現 武蔵野大学講師、東京インカレ組合員）と藤本ゼミの学生は、数年にわたり「Peace Now」への参加を続け、平和を学ぶ活動に活かしている。

ここでは、「Peace Now」に参加した学生の声を紹介する（以下は、2018年12月の大学生協全国総会での大澤寛太さん、内田陽菜さん（武蔵野大学学生、インカレ組合員）の発言（参考文献(1)所収）による。発表当日は、この発言を映像で紹介する予定である）。

（大澤さん）「武蔵野大学の大澤と内田です。

今から13年前ひとりのゼミの先輩がピースナウ広島に参加したのを口火に、藤本ゼミは毎年ピースナウに参加しています。

ゼミの場が神奈川大学から武蔵野大学に変わり、武蔵野大学には生協がない為、昨年と今年は東京インターカレッジコープの組合員になり、ピースナウ広島長崎沖縄に各2名ずつ参加させていただきました。

ピースナウが平和を学ぶきっかけになった人や、元から平和を学んでいてピースナウに参加した人といるでしょう。

僕たち2人は後者なのですが、平和とは1人1人「私にとっての平和」があると思います。

今回総会のこの場で1つの平和をみなさんに発信したいと思います。

（内田さん）

私は毎年、カンボジアにある、障害を持つ女性の自立を支援する団体でお手伝いをさせていただいています。長期間の休みになると、彼女たちに会える喜びでいっぱいになります。ハンディキャップを持っていても、どんなに辛い過去があったとしても、今の幸せを1つ1つ感じながら生きている彼女たちの笑顔が私は大好きです。

今年の夏は、カンボジアに加え、東京インターカレッジコープさんのお陰で、ピースナウ長崎にも参加することができました。

ピースナウに参加したことで、平和学を学ぶ1人としてさらに成長できたと胸を張って言うことができます。

私にとっての平和とは、安心して明日を迎えることができるということです。今年の8月8日の夕方、長崎の空をふと見上げてみると、とってもきれいな夕焼けが広がっていました。その空を見た時に、あの日、明日を迎えられなかった人々のことを想いました。私は今日この空がきれいだったと、幸せな気持ちで眠りについて明日を迎えます。でも当時この場所にいた人たちには明日がやってこなかった。そう考えた時、重い鉄の塊が胸に突き刺さるような気持ちになりました。

ピースナウで出会って共に学んだ仲間たちは、戦争がなければ出会わなかった人たち。原爆がなければ語らなかった議題。平和について考える時間は、素晴らしいものであるけれど、残酷だと思いました。この出会いと時間を大切にそれぞれができることをゆっくりで良いからすべきだと、強く感じました。

平和について考えるきっかけはなんでも良い。この学問に興味を持って関わる人ならば必ずわかると思います。私たちが動かなければ何も変わらないということを。

最後になりますが、皆さんは今年の6月23日沖縄の慰霊の日で平和の詩を読み上げた、相良倫子さんの言葉を覚えていますか？力強い思いを、輝いた目で語っていました。私は彼女の生きる未来を守ることができる大人になりたいと心から思います。」

6. おわりに

大学生協の中で異色の存在であるインカレは、一方では未設立校の学生・教職員すべてを対象としうるという意味で大きなフロンティアを有している生協でもある。事業面・供給面で少なからず課題を抱えてはいるが、「健康」「学び」「平和」といった大学生協ならではのテーマで多くの学生・教職員を仲間にできる可能性を持っているといえる。この両面をともに伸ばすことで、ますますの成長を期待するとともに、大学生協に関わる多くの皆さんにインカレを知ってもらい、インカレのある都府県の生協未設立校の学生・教職員にぜひインカレ加入を勧めていただきたい。

参考文献

(1) 石毛昭範，藤本俊明，大澤寛太，内田陽菜：“インターカレッジコープの意義と抱負”，univ.ＣＯ-ＯＰ，vol.427，pp.39-40（2019）.